

# IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 157, 2012

## VIEW 展望

映像メディアの世界劇場化とポケットブック化／近藤耕人…2

## INFORMATION 学会組織活動報告

第38回大会実行委員会…3 機関誌編集委員会…3 映像表現研究会…3-5 支部・研究会だより 中部支部…6-7 東部支部 クロスメディア研究会…8-12 アニメーション研究会…13 総務委員会…13 研究企画委員会…13

## REPORT 報告

東部支部第29回映画文献資料研究会「戦前戦中期・記録映画におけるドイツと日本の影響関係をめぐって——ドイツと日本の資料調査に関する中間報告」／奥村賢…14

## FORUM フォーラム

映像情報メディア学会映像表現&CG研究会「映像表現フォーラム」発表募集のお知らせ…14

## FROM THE EDITORS

編集後記…14

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第157号」2012年1月1日発行  
 発行人:豊原正智 編集担当/総務委員会:岡島尚志(委員長)・古賀太(副委員長)・  
 岩本憲児・応雄・橋本英治・山田幸平・和田伸一郎・奥野邦利

日本映像学会事務局:176-8525 練馬区旭丘2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内  
 phone:03-5995-8287 / fax:03-5995-8209 / e-mail:JASIAS@nihon-u.ac.jp

<http://jasias.jp/>



日本映像学会

# 映像メディアの世界劇場化とポケットブック化

近藤 耕人

テクノロジーの進化は人工光や波動でわれわれの脳を浸蝕し続け、それをベースにするアートの多様な展開には人間主体の批評が追いついていけず、防御する間もなくそれらは生活、娯楽、学習の環境となり、効率と面白さを享受するうちに、反省する間もなく人間の思考を突き抜けて魂を奪いかねない時代になっている。

19世紀が絵画から写真への移行が始まった時代と見れば、絵画が写真術を利用したり真似したりして新しい表現領域を拓くうちに、20世紀は映画からTV時代に発展し、現実や空想が映画になったり、現実が映画を模倣したりして、21世紀を迎えた途端にまさにキングコング映画がニューヨークで現実となり、映画のシーンのように衛星TVで世界に中継された。映画と現実の報道との区別がつかなくなったほど鮮やかに演出された映画映像と見えたのである。マグナムの写真家ですら電話で起こされ、窓ではなくTVの映像を開いて現実を認識したのだ。

イベント・ホールの大スクリーンは、映画館とは違って同時に見るステージのパフォーマンスよりも迫力ある視覚的現実となる。映像メディアの大インスタレーションはキュビズムの現実環境化だが、一方そのメディアがすべて個人のデスクのパソコンに縮小され、タブレットやポケットブックの形で頭の近くに親密化され、脳内のイメージに取って代わることはないまでも、自発的想像力の場を奪いつつある。映像もイラストもない文字記号の文庫本が読者の内部に映し出させるイメージの果てしない連鎖。だが先にイメージを設定する映像は頭の中にイメージがはみ出して湧き出るのを妨げる。

本のページに取って代わりつつあるパソコンのモニターやタブレット端末やケイタイの画面は身近な道具として、身体の外部のイメージから内部のイメージに映り替わろうとしている。額に接するようにある液晶のイメージはいつの間にか額の内部に侵入する。知らぬ間に額の内側のスクリーンに映っているのである。それは世界の映像環境を眼鏡のように身近に縮小し、身体は足で地上を歩くというよりも、頭

のイメージの中を映画のように移動し、そこから抜け出して足の上に戻ったり、また世界の映像に乗り移ったりする。液晶画面は額の縁に取りつけられたサンルームで、外の世界が見えもすれば頭の部屋の一部でもある。20世紀の後半に情報源がTVからパソコンに、個人の会話が固定電話から携帯電話に移り、人はますますプラトンの洞窟ならぬ繭の中に入り込み、井の中の蛙ならぬ繭の中の蚕になりつつある。蚕はやがて変身し、蛹から脱皮して外の世界に飛び立つが、人が飛び立つ世界は相変わらず繭の中の情報世界ということになる。しかし何十億という蚕が半透明の液晶の壁を通して情報を共有するうちに、ビラや新聞よりも遠く国境を越えて瞬時に世界の状況を知るようになる。

市民が繭から街頭に出、独裁者を倒す革命に参加することもあれば、素性の知れぬ他人からの密やかなメールを親密なことばと思い、自分の掌の温もりを他人の手の優しさと錯覚し、その他人が偽のことばでなく生の人間となって現れたときに騙されることもある。他人のことばと声の届く距離がいつも枕元の会話ほどに近づき、逆に個人のつぶやきが広く伝播して万人の声になったりする。地球が映像メディア劇場になり、テロや革命や地震や津波の映像が世界同時に共有され、遠く離れながら身近に現実を見て恐れ、やがて反復されるうちに見慣れた映像になる。一方では孤独な繭の中が明るい液晶画面になり、その小さな居住空間が決まり文句を反復思考する頭脳空間となり、繭頭になっているのも知らずに安住し、繭を出て自分の目で見えないものを見、自分の耳で聞こえないことばを聞き取り、闇の中を手探りで這い進んで確かめることをしない習慣が付き、それができなくなっている。

昔「目蓋のある映像はないか」というエッセイを『映像学』に書いたことがある。それを読んだ人はなにもいわず、にやにやしていた。「見えない映像はないか」、「聞こえない音楽はないか」、「意味のない文学はないか」といつてみたい。それはある。マーク・ロスコやジョン・ケージやサミュエル・ベケットはそれを盲目の手でつかもうとしたひとたちではないか。

(こんどう こうじん/明治大学名誉教授)

# 日本映像学会第38回 大会実行委員会より メッセージ

大会実行委員長 中村 滋延

前回の会報(第156号)でお伝えしましたように、日本映像学会第38回大会実行委員会(主催校:九州大学大学院芸術工学研究院)では、「映像の拡張性を考える—スマートフォンからソフトウェアアートまで」(6月2-3日、九州大学大橋キャンパス)を大会テーマに掲げ、鋭意準備を進めています。講演会、シンポジウムの開催企画の他に、主催校独自の開催企画として、工学・デザイン系の修士学生によるショート・セッションも計画しています。また、インスタレーションなど工夫を凝らした映像も応募できるようにするなど、作品発表の充実も目指しています。詳細は、1月中旬頃に発行予定の第2通信にてお知らせいたします。なお、同時期に大会専用のホームページを開設する予定です。会員諸氏におかれましては、多数のご参加、ご発表をお願いします。

(なかむら しげのぶ/九州大学大学院芸術工学研究院)

# 機関誌編集委員会報告

委員長 村山匡一郎

『映像学』87号がお手元に届いたかと思います。前号86号の編集後記において触れたように、この87号から「委員会預かり」という査読の新しいカテゴリーを採用しました。だが、初めての試みということもあり、その意図が十分に伝わらずに混乱や戸惑いを覚えた投稿者もいたようです。そこで改めて「委員会預かり」についてお知らせしたいと思います。

この「委員会預かり」という査読カテゴリーは、掲載不可の判定とは別枠の評価になります。投稿された当該号に掲載するには修正による改稿が必要と判定されたが、その改稿が当該号の刊行には時間的に難しいと判断されたため、次号掲載の予定で余裕を持って改稿していただくというものです。

「委員会預かり」となった論文の執筆者は、査読評価をもとに修正ないし訂正を加えて改稿し再提出していただけます。その際、投稿ないし再投稿と区別するため、締切り期日を1カ月半前倒しにします(偶数号は2月末日、奇数号は7月15日)。ただし改稿し再提出された論文が再査読で掲載不可と判定された場合は、「委員会預かり」という別枠扱いを外され、改めて再投稿していただくことになります。

以上が「委員会預かり」という新しい査読評価ですが、87号では投稿論文のうち3つの論文が「委員会預かり」となっています。学会誌の水準を保ちながら多くの論文を取り上げたいという編集委員会の意向を汲み取っていただき、会員の皆さまの今後の投稿を期待したいと思います。

(むらやま きょういちろう/多摩美術大学)

# 映像表現研究会報告

代表 伊奈 新祐

以下は、映像表現研究会が運営する「インターリンク=学生映像作品展(ISMIE2011)」の京都上映会(10月)と東京上映会・シンポジウム(11月)、および講演会(京都研究会,11月)の報告です。今後「ISMIE2011」の代表作品集から今年度の選抜作品の選考を行なう予定です。また上映会は、1月に名古屋学芸大学にて巡回上映が予定されています。上映会を希望される場合は、研究会事務局(日大・奥野会員)までご連絡下さい。

映像表現研究会代表:伊奈新祐

<1>

「インターリンク=学生映像作品展(ISMIE2011)」(京都上映会:10/15-16)

京都上映会を10月15日(土)16日(日)に「京都メディアアート週間2011」(inスタジオ「kara-S」(cocon丸鳥3階):10/14~16、主催:京都精華大学 KINO-VISION + Goethe-Institut Villa Kamogawa)のプログラムとして実施しました。以下の参加20校による作品集DVD(各校25分以内)は、「リクエストブース」(2セット)で視聴できるように設置し、10分以内の各校代表作を2つの上映プログラムとして、各2回スクリーン上映を行いました(約60名の参加者)。

上映会場



リクエストブース



cf.(参加校:50音順)

阿佐ヶ谷美術専門学校/大阪芸術大学/九州産業大学芸術学部/京都精華大学芸術学部/尚美学園大学/女子美術大学/成安造形大学/宝塚大

学/多摩美術大学/東京工芸大学芸術学部/東京造形大学/東北芸術工科大学デザイン工学部/名古屋学芸大学メディア造形学部/名古屋市立大学芸術工学部/日本工学院専門学校/日本大学芸術学部/文教大学情報学部広報学科/北海道教育大学/明星大学情報学部/早稲田大学川口芸術学校

<2>

映像表現研究会が主催する講演会

「講演会+ (上映:ディスカッション)」(11月12日(土)14:00 ~ 16:30)

会場: 京都国立近代美術館 1階講堂

(1) 講演+参考作品上映 (14:00 ~ 15:40)



講演者: イボンヌ・シュピールマン Yvonne Spielmann (イギリス・西スコットランド大学教授)

演題 「ビデオ美学: テクノロジーからメディアへ」

(2) ディスカッション (15:50 ~ 16:30)

パネラー: イボンヌ・シュピールマン

: 伊奈新祐 (京都精華大学芸術学部教授)

: 海老根剛 (大阪市立大学大学院文学研究科准教授)

: 森下明彦 (国立国際美術館客員研究員)

\* 著書『Video: The Reflexive Medium』(独語, 2005)の日本語版『ビデオ: 再帰的メディアの美学』の出版記念(三元社)を兼ねた講演会+ディスカッション。シュピールマン氏は、10月初めより国際交流基金の助成をうけ、11月末まで日本(東京と京都)に滞在しました。

<企画の背景と内容>

2009年に東京国立近代美術館で開かれたビデオアート初期に着目した展覧会「ビデオを待ちながら」、また同年から2010年にかけて各地を巡回した「日米初期ビデオアート上映会: Vital Signals」は、久々のビデオアートに関する展覧会・上映会であった。また本年10月末には、国立国際美術館で「日本のビデオアート~80年代~」の企画上映会が予定されていた。

ビデオアートも40数年の歴史となり研究がスタートし始めたというところであろうか。欧米では、すでにビデオアートに関する研究書は多く存在するが、これまで日本語で読めるものは展覧会かフェスティバルのカタログ、あるいは専門雑誌に掲載された論文に限られていた。この意味で本書『ビデオ: 再帰的メディアの美学』の存在は、本格的な“ビデオ(アート)”に関する理論書として最初の翻訳本といえよう。シュピールマン氏は、国際的に活躍する研究者であり、現在、イギリスの西スコットランド大学(ニューメディア担当)教授としてグラスゴーとベルリンを拠点に活動している(元ドイツのブラウンシュバイク芸術大学教授)。



本書の英訳は、アメリカのMIT プレスより出版(2008)され、2009年にメディア生態学協会(MEA)によってルイス・マンフォード賞を受賞している。2010年には本書に次ぐ著書『ハイブリッド・カルチャー』(独語)を出版し、同じくMIT プレスによって英訳が進んでいると聞く。ここでは日本のメディアアートの作家(藤幡正樹、岩井俊雄など)の作品が分析対象となっている。講演では、今回出版された日本語版『ビデオ:再帰的メディアの美学』の中心テーマである「ビデオ美学:テクノロジーからメディアへ」というタイトルのもと、著者のビデオ(アート)に関する研究動機、研究状況から始まり、フィルムやコンピュータと比較しながらビデオの特性(視聴覚メディア、プラグイン・メディア、フレームに束縛されないメディアなど)を具体的な参考作品(ダン・サンディン、ヴァスルカ夫妻、パイクなど)の上映を通じて解説された。休憩後、パネラー3名とディスカッションを行なった(当日の参加者数は、43名:会員外の一般・学生を含む)。

\*日本語版『ビデオ:再帰的メディアの美学』(監訳:海老根剛、翻訳:柳橋+遠藤、三元社、約500頁、¥6300)は、研究会当日(11/12)には間に合わなかったが、11月末に出版された。

<3>

「インターリンク=学生映像作品展(ISMIE2011)」(東京上映会・シンポジウム:11/26,27) 報告

奥野邦利

11月26日、27日の両日にて東京オペラシティ32階のアップルジャパンセミナールームにて開催しましたISMIE2011東京会場は皆様の協力のもと、大過なく終えることができました。例年の如くシンポジウムには大勢の先生方にご参集頂き感謝しております。

今回の来場者はシンポジウムの50名ほどを含め、2日間で約110名になりました。例年よりも一週間ほど開催日が遅くなり、作品提出の時期に近づいた為か、学生の来場者がやや少なくなったのは残念でした。ゼミの振替など、ご協力頂いた先生方には取り急ぎここにお礼申し上げます。

例年の如くISMIE2011東京会場では、開催初日の18時よりシンポジウムを実施いたしました。今回は関西テレビ主催「BACA-JA2011」受賞10作品を上映した後に、今日、作品評価は如何にして成されているのかを問題の中心に置きながら、各パネラーより色々な意見が交換されました。1990年前後までは機材的なものへの関心が、一定の割合で創作の動機付けになっていたが、今日では映像創作における機材的な制

約が少なくなったことで、創作に対する動機が個々に委ねられる傾向が強まり、同時にそれは作品を評価する際の問題にも繋がるという点が議論されました。



<参加者>末岡一郎、伊奈新祐、太田曜、加藤到、風間正、竹林紀雄、奥野邦利、瀧健太郎、伏木啓、芦谷耕平(敬称略)

また、これまでもお伝えしましたように、今年度もISMIE2011のセレクト集を作成する予定であります。これにつきましては、改めてスケジュールのお知らせを致しますが、セレクト集作成に参加される参加校の先生方には、You Tubeへアップロードされた代表作のURLをISMIE事務局までご連絡下さいます様に重ねてお願い致します。参加校の皆さんには、お手数をお掛けしますが、ISMIE事務局としましては、様々な交流の一助となればと願っておりますことをご理解頂ければ幸いです。

ISMIE 2011 事務局  
〒176-8525 東京都練馬区旭丘 2-42-1  
日本大学芸術学部映画学科  
03-5995-8220  
担当:奥野邦利  
mail: okuno.kunitoshi@nihon-u.ac.jp

(いな しんすけ/京都精華大学芸術学部)

## 支部・研究会だより 中部支部

和田 伸一郎

中部支部では、「アーカイブ」をテーマに、前編を「デジタルアーカイブ」、後編を「映像アーカイブ」と題し、2011年度の第一回、第二回支部研究会を下記の要領でそれぞれ行った。なお第一回では支部総会を、第二回では幹事会を行った。

### ●第一回研究会

テーマ：「デジタルアーカイブ」(参加人数：20名)

日時：2011年9月23日(金・祝)

会場：IAMAS 情報科学芸術大学院大学

(岐阜県大垣市領家町3丁目95番地)

### ■第一部：研究発表

「儀礼としての映像視聴イベント—パブリックビューイング参加者の日独比較分析」

発表者：西尾祥子会員

(名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程)

### ◇発表概要

テレビ放送されるイベント視聴を儀礼の通過と見なす、いわゆるメディア・イベント論が90年代以降耳目を集めてきた。現在ではパブリックビューイングと呼ばれる家庭外での映像視聴イベントが世界各地で展開している。筆者はパブリックビューイング参加後のアイデンティティ認識をめぐる問題を明らかにするために、日独参加者へのインタビュー調査について、ジェネップの儀礼研究を理論的枠組みとしたプロトコル分析を行った。イベント期間中は脱構造的環境が発生し、国旗や国歌に関する問題を棚上げする様子は日独で共通点があったが、儀礼通過後に集会的アイデンティティだけでなく自己アイデンティティの肯定が見られるドイツ参加者に対し、日本の参加者にはどのような傾向も見られないという差異が発見された。

### ■第二部：話題提供+ディスカッション

話題提供+パネラー：関口敦仁氏(美術家/IAMAS学長)

パネラー：幸村真佐男会員

(メディアアーティスト/中京大学情報理工学部教授)

パネラー：前田真二郎氏(映像作家/IAMAS准教授)



### ●第二回研究会

テーマ：「映像アーカイブ」(参加人数：40名)

日時：2011年12月3日(土)

会場：相山女学園大学星ヶ丘キャンパス

(名古屋市千種区星ヶ丘元町17番3号)



### ■第一部：パネル・ディスカッション(映像人類学の立場から)

パネラー：宮下十有会員(相山女学園大学文化情報学部講師)

パネラー：木田歩氏(南山大学人類学研究所研究員)

### ■第二部：研究発表

「写真と風景を往き来する眼差し」

発表者：茂登山清文会員(名古屋大学大学院情報科学研究科准教授)

### ◇発表概要

現代ドイツにも見られるように、写真表現において、風景をモチーフの主要な部分としてきたアーティストは少なくない。そこにD. Companyは「自然を制御する欲望」を見、S. Brightは「逃避、郷愁の形」

でもであると指摘する。一方で「ピクチャレスク」は、絵画と風景とを往還するなかで、現実の景観をつくりだしてきた。この発表では、美術作品と風景とが交差する事例にふれつつ、写真というメディアを通して表象されるアーティストの眼差しと景観づくりとの関係をさぐる。

第一回、第二回ともに、諸事情から、予定していた内容が急遽変更になったため、概要も含めて以下では研究会の内容について字数が許す限り、また筆者の雑感を交えながら、報告させていただきたい。

第二回研究会では宮下氏からは、アーカイブされた映像をどう物語化(象徴化)するかという問題提起が行われた。理解可能な象徴秩序の意味の網の目の平面から零れ落ちた、そこから見れば、無意味なシミに当たるとような映像の無数の断片群がある。人類学や民俗学はこうした映像を撮影・保存してきたのであるが、それはもちろん、芸術を目的とするのではなく、(他者の)文化を理解することを目的とするものであった。そのため必然的に、撮られたものは物語へと収斂していくのではなく、日用品など一見無意味で偶然映り込んでしまったものの断片的な集まりになる。

博物館は、テーマを設定しそれらを展示する装置である。そこには枠組みが与えられるが、あくまでゆるいものであって、したがって博物館は、断片群を特定の物語化へと収斂させるよりは、解釈を観客に対してオープンにすることに配慮する。

それでは、研究者はこうした断片群をどう再構成、物語化するのか。これに対し、宮下氏は「貝塚としての映像アーカイブ」という興味深い問題提起を行った。断片群を安易に物語化することを拒否しつつ、また、フィルターをかけ、選別して分からないものを排除するのではなく、さしあたりどんなものでもアーカイブに残し、開かれた解釈を待つという態度である。こうした態度は、貧困な物語化に抗するためにも、貴重なものだと思う。

他方で、茂登山氏の発表も興味深く考えさせられるものだった。氏は、コード化された視線によって再構成される標準的な風景とは異なる風景を、一部の写真家の作品から読み取ろうとする。すなわち、いわばうち捨てられた場所にあるような風景、象徴秩序の平面からすれば全く無意味であるような場所の風景、に焦点を当てる写真家の視線に注目する。

写真というメディアはそうした無意味さを、映像(動画)よりさらに徹底して「見えるものにする」がゆえに、安易な言葉をよりいっそう拒絶するようになる。発表内で紹介された写真は、いずれもそうしたもののよう感じた。こうした無意味さ(もちろん肯定的な意味での)に注目する氏の姿勢もまた、標準的な物語、表象に回収されないものへの感性を重要視する点で貴重なものだ。

前後するが、第一回研究会では、デジタルアーカイブに関するものとして、クラウド化によって膨大な数の動画・画像が特定の意図をもたないまま瞬間ごとに保存されていっているという状況が問題にされ、幸村氏を中心に議論がなされた。東日本大震災後、現地で撮影された大量の動画・画像の断片群の中には、単に「被災者」という枠に収めていいはずもない、現地での人びとの生活の記録が埋もれている。これを後の誰が再構成するのだろうかということは問うに値するし、また、どこがアーカイブを管理する機関になるのかということについては、関口氏を中心に議論が行われた。

前田真二郎氏によるプロジェクト、「ある一日を撮影。前日に声を録音、明るる日に声を録音」という指示書をもとに制作された即興映画オムニバス「BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW」は、ウェブ、YouTubeを活用した新たなドキュメンタリーの形式であり、その中から震災後の福島、宮城、岩手のある一日の映像が、報告内で一部上映された(山形国際ドキュメンタリー映画祭2011、ニュー・ドックス・ジャパンに選出。ネットでも公開中(<http://solchord.jp/byt/>))。

おそらく、いつの日か映画が「東日本大震災」を題材にする日が来るだろう。しかし映画という形式ではないものによっても、この再構成が行われるにちがいない。これについては、映像人類学や民俗学の役割が大きくなっていくだろうし、また、映画のカメラマン、研究者には見えない風景を、写真家なら見えるものにするができるかもしれない。他方、ウェブなどネット上のプラットフォームを使った、前田氏が行っているような実験的な試みが増えていくことも間違いない。さらには今後、HTML 5のような技術が、映画などの古典的なモンタージュという技法とは異なる映像表現の技法を可能にするかもしれず、これを有効に利用するアーティストが、無数の動画の断片を再構成する新たな手法を考案できれば、古い「物語という形式」も変化していくことが期待できるのではないだろうか。

(わだしんいちろう／中部大学人文学部コミュニケーション学科)

## 東部支部クロスメディア研究会

李 容旭

### 第5回クロスメディア研究会活動報告

多ジャンルの研究者、作家らの作品展示、研究発表を下記のごとく行いましたので報告申し上げます。

記

タイトル：「東京クロストーク 2011」

作品展示

日時：平成23年9月13日ー18日 10時ー19時

場所：アネックスギャラリー

研究発表

日時：平成23年9月18日 13時ー17時

場所：キッド・アイラック・アート・ホール

<http://www.kidailack.co.jp/>

スペシャルゲスト：Kimathi Innis 氏

「Summers of Freedom: The Development of a Civil Rights Historical Drama」

研究発表

森本純一郎会員「深夜アニメにおける実験」

柴岡 信一郎会員「近代産業遺産・足尾銅山の映像記録」

三橋純会員「風景写真から見る写真表現の可能性」

河合 明会員「現代アートと仏教思想」

李 容旭会員「映像表現の可能性ー小、中、高校生らとの映像ワークショップを通して」

宮田徹也会員「コラボレーションの批評の可能性について」

山下史朗会員「リンチ、クローネンバーグ、デ・パルマ、秘匿に向けた幻視力」

作品展示

柴岡信一郎会員「近代産業遺産の記録ー足尾銅山の現在ー」

三橋純会員「Qualia equilibrium」

李容旭会員「そして、また道はつづく」

河合孝治氏「Matrix: 一乗法界図」

相田晃良氏「東京の透視図 / Tokyo Perspective」

ゲストスピーチとしてはニューヨークで活動しているフィルムメーカー イニス・キマシ氏により「Summers of Freedom: 公民権運動を描く作品の脚本の構築について」の題材で講演があった。講演の要旨は以下の通り。

### Summers of Freedom: The Development of a Civil Rights Historical Drama

Kimathi Innis  
Film Maker

The film I'm supposed to produce is about a duality of two brothers who face the Civil Rights Movement.

This session was an overview of how the screenplay is developed from beginning to end. Development can be divided into three parts: Inception, incubation and execution.

Inception dealt with the beginning of ideas, in the case of Summers of Freedom Ki saw an interesting development in the civil rights movement where the movement went from a "non violent" movement to a more aggressive and even militant one. Here is where we have the possibility for dramatic change in characters. Perhaps a character who was once "non-violent" changing to a more militant approach.

Incubation was thinking about the backgrounds of these proposed characters. What brought them to who they are at the beginning of the story? What actions can come about to make them change? What are the setting that can bring about change in the characters. Running themes such as "duality" and "protecting the home" can be elements to bring this about.

Execution will be using all the previous background work put into story and development of the characters and plot into action. If the background work was done thoroughly the characters should "speak" for themselves and given the circumstances that have been laid out.

公民権運動の時代に生きる2人の黒人兄弟のそれぞれの二重性を描く映画作品 "Summers of Freedom" を企画している。今回のプレゼンテーションではこの作品の脚本が如何に構築されるかを発表した。構築は3つのパートに分けられる。開始、孵化、実行である。開始とは最初のアイデアを表すものであり、"Summers of Freedom" において論者が抱いたそれは公民権運動における、非暴力から攻撃性を持つものへの変化である。ここに登場人物たちのドラマ的变化の可能性がある。かつて非暴力であった人物の、主義主張のために何も恐れない好戦的な態度への変化にそれが表される。孵化は、こうした登場人物たちのバックグラウンドに向けたものである。物語の最初に彼らがそうした人物であることは何によってもたらされるのか？そして、如何なる行為が彼らを変えさせたのか？これらが登場人物の変化を確認させるものとなる。二重性やホームを守るといったこの作品のテーマが、それらの要素を創出する。実行において、これらの前提を物語に役立たせ、登場人物とプロットを構築する。これらの前提が登場人物たちを語らせることができ、物語空間の環境を整備する。

(山下史朗会員訳)



研究発表は作品展示、上映会の最終日に行われた。研究発表への参加者は52人、活発な質疑応答が行われた。

以下は研究発表、作品展示の概要。(到着順)

研究発表

#### 秘匿に向けた幻視力

山下史朗 (映画批評)

本発表において、デイヴィッド・リンチ、デイヴィッド・クローネンバーグ、そしてブライアン・デ・パルマが表す主人公の志向作用の考察を行っ

た。彼らは主人公の精神世界や社会を綺想的な様式を用いて不確実性に満ちた秘匿として表現し、(理念を提示するのではなく) 幻視力のあるがままを視せ聴かせる。ここで言う秘匿とは社会的に封印された非理性的なもの、或いは不可知として認識される現象を表すものであり、幻視力とは主人公にも内在するはずの秘匿を叡智としてあらしめる想像力を言い表すものである。

リンチにおける秘匿は社会から放棄された非理性であり、多くの場合、女性性に表される。一方、幻視力は男性の魅惑されるものを(迷いながらも) 追うときに生まれるファンタズムとして表される。ファンタズムはやがて非理性と同一化され、叡智に転化される。『ブルーベルベット』の秘匿はサンディの影の部分や存在を隠すかの如くにウィグをつけるドロシーに、幻視力はドロシーに魅了されるジェフリーの迷いに、『マルホランド・ドライブ』の秘匿は2人の女優やホームレスに、幻視力は“This Girl”を追い求めるハリウッドの男たちに表される。ファンタズムを生む男の眼差しはこの社会に痛みと悲しみをもたらすのであり、これもまた非理性的なものではないことが顕在化される。そのとき、秘匿がその社会全体を光で照らす。迷いや苦しみは消えることはない。しかし、森羅万象が在るこの宇宙 - これは近代以降、非理性的なものに捉えられらるだろう - は全てを包み込む。リンチのコスモスは非理性に顕される。

クローネンバーグにおける秘匿は、科学によって自己組織化される精神的物質たる身体である。幻視力は暴力性に満ちながらも無垢な本能を覚醒させる情動であり、これは合理化された社会を革新することに向かう。『ビデオドローーム』の秘匿はオブリヴィオンによって意識が拡張されるマックスに、幻視力は彼のメタモルフォシスに、『クラッシュ』の秘匿はヴォーンが飛ばすリンカーンに導かれるジェームズに、幻視力はヘレンやガブリエルの傷、或いはジェームズが自身に刻印するタトゥーに表される。科学のスピードに伴い表される身体メタモルフォシスや傷、この猥褻さが革新の証となる。と同時に、理性的なものとは非理性的なものが混在する社会における革新そのものもまた問われる。解脫と問いがオートポイエシスの社会を形成する。

デ・パルマの秘匿は多くの場合、ベトナム戦争以降のアメリカに表されるが、それは不信を募らせられる対象というより得体の知れない社会として描かれる。幻視力は、その社会で死者のように生きる人物を追うとき社会の一員である主人公が抱く強迫観念に表される。『ミッドナイトクロス』の秘匿は大統領候補暗殺が起こるその社会に、幻視力は川に沈められた後に欠伸をし続けるサリーを追うジャックに表される。アフレコが完了しないフィルムに表される生気を未だ帯びない感情が、強迫観念として秘匿に志向する。そして、サリーの叫びが『キャリア』のあのラストの飛び出してくる手のように、我々に向けて得体の知れないその社会を差し出す。強迫観念から未だ解き放たれることはない。しかし、感情には変化を求める生気が帯びる。

リンチ、クローネンバーグ、そしてデ・パルマは理性や規範といったものに集約されることのない猥褻さや幻覚、神秘、或いは自己や記憶の喪失といった非理性的な形象(ヒトの心に形作られる事物の像)を表現する。客観主義になる現代社会において、こうして顕されるあるがままの主観的な形象にこそ人間の智への問いが隠されているのではなかろうか。秘匿と幻視力とは何か、その様式の探求を今後さらに深め、考察の課題とする。

(やました しょう／映画批評)

## 研究発表

### 深夜アニメの実験性

森本純一郎(東京工芸大学非常勤講師)

#### 1. 始めに

深夜時間帯のアニメーションは、独自の進化を見せている。それは、通常のテレビ放映作品とは異なる商業形態、対象となる視聴者が存在するからである。そうした環境が、実験的な表現を生み、アニメーションの命題を前景化している。今回は“深夜アニメにおける実験性”を明らかにするものである。

#### 2. 深夜アニメの現在

テレビにおけるアニメーション作品の需要は、主に対象となる視聴者(子供)層が視聴可能な時間帯に集中してきた。しかし、視聴者層や嗜好の幅が広がり、従来とは異なる深夜時間帯にも需要が拡大している。特にこの10年は、この時間帯の作品群が、アニメーション表現を変えたと言っても過言ではない。独立UHF系局で放映されている作品やフジテレビ系の深夜アニメシリーズ“ノイタミナ(noitaminA)”<sup>1)</sup>などがそれである。そこには、深夜アニメが、視聴率によるスポンサー収入ではなく、DVD化等による二次、三次収入を中心とした制作費回収の商業形態を採っていることもあるが、特定のファン層への訴求が必要とされる。そこにある試みが、実はアニメーションにとって、非常に実験的であると言えるのである。

#### 3. 深夜アニメにおける実験

『涼宮ハルヒの憂鬱』(京都アニメーション、2006)では、シリーズの全14回を物語の時系列を無視した順番で放映したDVD化された時には順序を時系列に添ったものに直していたが、シリーズ構成という概念を揺るがすものであった。以降、深夜時間帯の作品では、時系列の組み換え、若しくは繰り返しは、しばしば行われる。『四畳半神話大系』(マッドハウス、2010)では、繰り返しに加え、画面構成、絵柄や色の使い方までこれまでのものとは違う世界を見せた<sup>2)</sup>。これは、特定のファン層への訴求が、新しい物語、映像表現を生み出した結果と言える。更に『さよなら絶望先生』(シャフト、2007)で行われた実験は、今後のアニメーション表現を考える上で、ファンへの訴求だけでなく、テレビアニメを取巻く問題。絵柄や技法への固執、声優の存在についても実験がなされている<sup>3)</sup>。

#### 4. 結論

テレビ放送されるアニメ作品群には、マンガの映像化作品が多く、原作の世界観をどう活用するかに腐心されている。それは、各年代の視聴者全てに対して作られる作品に見られる傾向である。しかし、それでは映像芸術としての“アニメ”の特性を発見し、発展させることは難しいのではないだろうか。“深夜アニメ”という放送枠では、視聴者の需要に応えるべく作られた結果、独自性を獲得。従来の発想を覆す挑戦がなされているのである。

## 註

<sup>1</sup> フジテレビ、BSフジの深夜アニメ放送枠の名称。「アニメーションの常識を覆したい」という思いから“Animation”をローマ字読みで逆さまにしたのが語源。

<sup>2</sup> 2010年度文化庁メディア芸術祭アニメーション部門大賞を受賞

<sup>3</sup> 『【俗・】さよなら絶望先生(第2シーズン)』第7話『津軽通信教育』原作37話(影絵、クレイ、パステル画、シネカリグラフィなど様々なアニメーションの技法を使っている)。第6話『隠蔽卒』原作97話(登場人物たち〈声優〉のシャッフル)主要な声優が担当キャラクター以外の声を吹き込む(主人公の声だけで8人の声優が担当している)。

(もりもと じゅんいちろう／東京工芸大学非常勤講師)

## 研究発表

### 現代アートと仏教思想

河合 明 (芸術メディア研究会)

仏教思想は多様であるが、原始仏教では「神」のような絶対者、超越者を認めず現象世界を法則性によって説明する。その意味で仏教は宗教と言うより科学に近い。そのことが、心理学や哲学、そして脳科学などの先駆的存在として注目されている所以なのである。とりわけそれを現代の思想・科学・アートの概念に準拠するなら次の通りである。

#### 1. 生成変化消滅 2. 固定した存在より関係性 3. 無意識の構造

(仏教で1は無常、2は縁起、3は阿頼耶識・マナ識)

また仏教ではアートマン(自己)を否定しながら(正確には釈迦は自己を否定したのではなく自我を否定したのだが、以後の仏教者達に間違つて伝わった)輪廻を肯定したため、輪廻する主体をめぐって混乱ともいえる多様な解釈がなされると共に、固定した実体を認めないため、仏教は仏教自体にも執着しないと言う永久に脱構築の思想をさまよっているのである。

しかし、そうした特徴が以前からショーペンハウアーやニーチェ、現象学、ホワイトヘッドなどの思想との関連時として研究者達によって注目され、最近では、ポストモダン以後の思想や芸術との関連が論じられているのである。

禅の影響を受けたジョン・ケージの音楽は言うまでもないが、最近ではJ.パルク著による「Buddhism and Deconstructions」(ROWMAN&LITTLEFIELD, 2006)によってデリダと仏教の類似関係がクローズアップされている。またドゥルーズ著の「シネマ」は固定的な自己(エディプス)による「運動イメージから」から、脱自己的なノマドと言う「時間イメージ」への組み替えを映画による思考で表現したものであるが、これは仏教の「空の実践プロセス」を、また彼の内在平面と言う概念は仏教の縁起を想起させるのである。

仏教には無数の經典が存在する。従って探そうと思えば仏教の中には先にのべた以外にも、相対性理論、量子力学、カオス論、複雑系、オートポイエーシス、などと似たものが必ずと言っていいほど見つかるのである。そうかと言って仏教が西洋の知よりすぐれていると言っているのではない。人の考えること、つまり言語を使う限りその究極的な問い、たとえば自己言及的なパラドックスに至ると言う意味では、洋の東西を問わず同じなのではないかと思う。私たちはそこで、ナンガールジュナ(龍樹)とヴィトゲンシュタインが言うように言葉による分別知の限界

を知り、言葉では本質的なことを伝えることは不可能だということをおためて実感するのである。

(かわい あきら／芸術メディア研究会)

## 研究発表

### コラボレーションの批評の可能性について

宮田徹也 (日本近代美術思想史研究)

#### 1. 今日の美術の状況

芸術はそれだけで権威である。そのため、権威を標榜する芸術は批評を必要としない。1945年以後の日本美術の場合、一方で、例えば日展の最優秀賞の作品は日展の最優秀であることによって価値が認められる。後付けに作品を賛美する評を「賛美評論」とする。他方で権威を厭い、自由を掲げる前衛美術が存在する。アダムズ・シドニーの言う「対象の姿を変えて見せることができる」「優れた批評」(『アメリカの実験映画』フィルムアート社/1972年/9頁)には、批判精神が必要とされる。作品を擁護せず、対話を生み出す評を「批評評論」とする。今日の「現代美術」は前衛美術が持つ実験性と日展の権威性を兼ね備える為、「批判評論」を必要としない。

前衛美術の思想とは「未知の段階」に存在する。「夜の会」(1948年)は美術と文学が、「実験工房」(1951-7年)ではオペラと照明と美術と写真が、「製作者懇談会」(1955年-)では美術と映画の融合と離別が運動として為された。このようなコラボレーションは「未知の段階」を想定し、批評精神を持ち合わせる。我々は個々の内に存在する自らの権威と、どのように向き合うのが問題となる。

#### 2. 近代のダンスの変遷

芸術の根源を宗教儀礼に探ることができる。世界には様々な民族があり、その数に等しく儀礼は存在した。民族間では紛争が絶え間ない。16世紀までに発展した欧羅巴が亜細亜・アフリカを植民地化する。同時に欧羅巴は近代を迎え、宗教儀礼を芸術に昇華させ、バレエが誕生する。権威的で崇高なダンスと商業主義的で気休めを与えるショーは、資本主義の発達により融合する。21世紀を牽引する亜米利加は欧羅巴の植民地政策と文化の歴史を模倣し、民主主義の力により国策として文化を創り上げていった。亜米利加を規範とする日本に、他国のショーと芸術としてのダンスが共存するのはそのためである。

明治維新により日本政府はそれまでの芸能を「伝統」として読み直す作業を始めた。忘れ去られていた『古事記』や『日本書紀』を国粹的に読み直し、寺院を「建築」に、襖絵や軸を「絵画」に、仏像を「彫刻」と変化させた。様々な実験を繰り返した前衛的な性質を持つ能も「芸能」となる。15世紀初頭に成立し、弟子でしか読めなかった奥儀『花伝書』が一般公開されたのは明治42(1909)年である。このような状況は中世末期に発生した浄瑠璃、江戸期に生まれた歌舞伎、5世紀に伝わった雅楽も同様である。

#### 3. 現代のコラボレーションと批評の可能性

このように芸術の「分野」は近代の時点で確立された。個人の造形を「分

野」に当て嵌めず、1945年以降の運動に「分野」を見ないのであれば、それは「コラボレーション」ではないのかも知れない。更にその後の運動には映像や電子音楽といった、テクノロジーの問題が深く関与する。大学研究機関に存在しない批評の重要性を探る作業は、まだ始まったばかりなのである。

(みやた てつや／日本近代美術思想史研究)

研究発表

映像表現の可能性一小、中、高校学生らとの映像ワークショップを通して

李 容旭 (東京工芸大学芸術学部)

1 映像教育の一つの方法論としてワークショップをあげることができる。日々大学内で映像の制作教育に関わっていると技術と芸術的感性をいかにレベルアップさせていくばかり考えている訳だが、その成果はどうしても大学内で完結する場合が多い。展示、上映も仲間うちで終わりがち。映像で表現することの喜び、他者とのコミュニケーションの重要などをどう伝えるか。今回の映像ワークショップはそのようなことを意識した活動であった。

2 きっかけは2011年8月13日(土)から28日(日)まで伊豆大島で行われた「波浮港現代美術展」。李はこの美術展において3箇所に映像インスタレーション作品を出品した。映像ワークショップは総合ディレクタ高田芳樹氏の依頼により8月22日(月)、23日(火)、24日(水)の三日間行われた。

ワークショップのために事前に生徒募集を知らせるチラシを配布した。チラシの内容の一部。「みーっけ大島、さがせ今を!! ショット? ムービーワークショップ企画。テーマ: 大島の今を若者の目線で見直してみる。島の良さをCM映像でアピールしよう! 映画監督に挑戦しませんか?」

大島町立第一中学校の尾形勝義先生に協力を頂き、島の生徒8人が集まった。小学校1名、中学校4名、高校3名。李の研究室から11名の学生スタッフで5グループに班分け。事前に配られたワークシートをもとに企画会議1日、撮影1日、編集・発表で1日の順にワークショップを進行。



1日目: 大島町長が見守るなかで企画会議



2日目: 撮影



3日目: 編集・発表会



3 映像ワークショップは順調に終わり、1分のショートムービー作品が5本できあがった。そのうち何本かは今現在(12月10日時点)全国地方CMコンテストに出品されている。今回のワークショップを通して研究室の学生と島の子供たちは映像を作る楽しさを体験できたと思う。李の研究室の学生らもかなりの刺激を受けた。夏休みの期間中のワークショップであったが、3年後期の制作に多いにいい影響をもたらしている。最後にワークショップに参加した大島の生徒の感想をひとつ。「大学生ということで最初は緊張しましたが、すぐに打ち明け、作品のアイデアもまとまり、完成させることができました。人間にはコミュニケーションが大事で、そのなかからすばらしい作品が生まれることがわかりました。とてもたのしく制作することが出来ました。(尾形勝義「2011 波浮港現代美術展参加報告 現代アートがところをひらく」Biiku Bunka 2011年11月号 Vol.61 No.6 p41)

(り よんうく／東京工芸大学芸術学部)

## 作品発表

## 近代産業遺産・足尾銅山の映像記録

柴岡信一郎（学校法人タイケン学園）

今回の作品は栃木県にあった足尾銅山の現在の様子の映像記録です。

足尾銅山は日本一の銅産出量を誇った銅山であり、近代産業の発展に大きく貢献しました。一方、銅山による煙害で山は荒廃し緑を失い、川は汚染された過去があります。

足尾の街は過疎化が進む山深い地区ですが、かつては長屋、浴場、学校、病院が立ち並び、人々がひしめき合う生活空間が存在しました。それは現在でも、建造物跡や観光施設、山々の風景、治山事業等によって偲べれます。

現在、足尾では煙害で草木が生えなくなったハゲ山への植樹活動や鉱山施設での観光事業が行われています。一方で、日本の近代化に貢献した遺産の光と影を保存し、町全体をエコミュージアムとする構想もあります。

ここで矛盾が起こります。負の遺産であるハゲ山が、植樹活動により緑生い茂る山になると“遺産”ではなくなってしまうのです。遺産を残すことで天然のミュージアムとなります。過去を踏まえつつも、残す所は残す必要があるのでしょうか。

2011年は東日本大震災によってエネルギー政策が抜本的に見直されることとなりました。足尾も銅生産により19～20世紀の日本のエネルギー政策を支えた一方で、日本初の公害を引き起こしました。近代産業遺産の“光と影”の映像記録が、人間と自然の調和に役立つことを願っています。本記録がその一旦を担えれば幸いです。



(しばおか しんいちろう)

## 作品発表

## 『equilibrium』『Qualia』及び、口頭発表『風景写真から見る写真表現の可能性』

三橋純（写真家、横浜美術大学）

作品『equilibrium』のシリーズより3点と『Qualia』のシリーズからの4点、この2つのシリーズを展示し、それらを土台とした制作コンセプトとプロセスを口述発表として行なった。数年前に訪れたバリ島の儀式儀礼に触れ、ゴーギャンの大作『われわれはどこから来たのか われわれは何者か われわれはどこへ行くのか』(1897)をひな形にしながら制作した「equilibrium」は、その「均衡」という意味の元で現在に至まで作品のシリーズを続けている。また『Qualia』は、心象風景の体裁をとりながら記録と記憶の境界線を辿り、時間や場所など曖昧な印象を持たせる作風の作品で、今までに2回の写真展を行なっている。今回そのシリーズから4点を展示した。これら2つの作品のコンセプトや制作プロセスを汲んだ口述発表では『風景写真から見る写真表現の可能性』というタイトルとした。カメラがメカニカルで冷静に事実を記録する機能であるにも関わらず、写真を見る折、私たちは実に叙情的で感情的に見てしまう。19世紀に誕生した写真術が、絵画の表現に大きく影響を及ぼしたことは、様々な絵画作品からも伺い知れるが、同時にそれは絵画の写実表現から印象派への移行するきっかけともなった。絵画表現の歴史は写真術誕生以降人間の心の内へと向かい、そこに潜む個人の深層や無意識の箇所に触れようとしてきた。写真は本来持つクールな特性によって20世紀の大きな二つの世界大戦を始め、事件や現象を数多く記録して来た。しかし一方でその政治的意図やメディア操作が問われるようになった。20世紀末、100年前の絵画の転換同様、写真は心の内へ向っている。ここでは写真の扱い方の変化に仮説を立て、ロラン・バルトに端を発した記号論的なアプローチを経ながら、写真の表現力を敢えて記録性と対峙させながら試論を展開した。とりわけ100年前にバルビゾン派などの写実絵画の全盛期を経て印象派へ移行した絵画の歴史をなぞり、ここでは風景写真を例に上げ、写真に何が起こってきたか、また写真表現は何処へ進もうとしているのかを考察した。



(みつはし じゅん)

## 東部支部アニメーション研究会

代表 横田 正夫

平成 23 年度 2 回目のアニメーション研究会が 11 月 12 日（土曜日）に日本大学文理学部 3408 教室（3 号館 4 階）にて開催された。報告者は 2 名（いずれも非会員）によるものであった。一人目の報告者は人形アニメーターの奥津広美氏、二人目の報告者は東京工芸大学アニメーション学科の権藤俊司氏であった。奥津氏は、アニメーターとして川本喜八郎の「冬の日」に参加した体験を主に報告した。権藤氏は、毎年参加している Annecy でのアニメーション作品の動向、特に長編を中心に報告した。各発表者の要旨は以下のとおりである。

表題：川本喜八郎先生と人形たち——『死者の書』の日々を振り返って（14:30～15:30）

発表者：奥津広美氏（人形アニメーター）

要旨：日本を代表する人形美術家・人形アニメーション作家で、昨年惜しくも他界された、川本喜八郎先生の目指した「人形アニメーション」とは、どのようなものだったのか。集大成となった、長編人形アニメーション映画『死者の書』の制作エピソードを振り返りながら、考えてみたい。

「人形とは何か」、川本先生が、当時アニメーション助手であった私に発した、この問いの答えを私は今でも探し続けている。先生のアトリエで、人形作りを習っていたとき、先生は手にした一塊の粘土から、ヘラを使って、人形の首（かしら）を作って見せてくれた。まさに人形が生まれ、神秘的な瞬間だった。人形は、一つの役を演じるためだけに生まれ、精一杯生きて、死んでいくという宿命を背負っている。それゆえ、先生が目指した「執心」と「解脱」という、人形でしか表現できない世界があるのだと思った。

川本先生の人形たちと出会えたことは、私のアニメーション人生において本当に幸せなことだったと思う。人形と対話をしながら「魂」を吹き込むという、川本先生の教えを忘れずに、これからもアニメーションをしていきたいと思う。

表題：Annecy 2011 参加報告（15:45～17:15）

発表者：権藤俊司氏（東京工芸大学アニメーション学科）

要旨：本年 6 月 6 日から 6 月 11 日に開催されたアヌシー国際アニメーションフェスティバルのレポートを行う。

その中で近年のコンペティションにおける長編部門重視の傾向に注目し、長編部門のセレクションおよび受賞傾向を分析する。その結果を手がかりとして、フランスおよびヨーロッパにおける劇場長編アニメーションの動向を考察する。参考映像（予定）：Le Chat du Rabbín (2011)、Une vie de chat (2010)、他

奥津氏は要旨にもあるように人形の作り方を川本から伝授されている。発表では、氏の作成した頭と川本作成の頭を並べて映像提示し、自身のものは人間の真似であり、川本のもは人形のものになっていると語った。人形には、人形の生があるのであり、人間の真似であってはいけないというのである。また氏は「死者の書」の撮影風景の写真をたくさん提示し、川本との師弟関係の様子を興味深く語った。

権藤氏は Annecy での長編上映に変化があり、日本のように同じ傾向のものが並ぶのではなく、それぞれがキャラクターもスタイルも個性的であり、なによりもアニメーションフェスティバルで受賞した短編作家が抜擢されて長編作品の監督になる道があることを指摘した。ヨーロッパにおいて長編の製作本数そのものも増えていることも報告した。氏は、日本でほとんど目にする事のない長編の一端を、DVD 映像をまじえて紹介し、本報告を刺激的なものとした。

今回の研究会は、平成 24 年 3 月に計画している。

（よこた まさお／日本大学文理学部）

## 総務委員会報告

委員長 岡島 尚志

## 役員再任に関する内規について

すでに会報でご説明の通り、70 歳以上の会員には、役員に再任されることを事前に辞退できる制度の導入が理事会で承認されましたが、さらに一定回数の役員経験者に同様の権利を認めることについても理事会で決定しましたので、ここにお知らせします。

具体的には 2002 年 4 月 1 日に施行された役員再任に関する内規（「連続して 3 期 6 年を上限とする。ただし連続しない場合はこの限りではない」）に以下の第 2 項が加わります。

「役員選挙実施に際し、改選前の役員在任期数が累計 12 期以上であるか、または当該年の 4 月 1 日現在で年齢が満 70 歳以上となる会員は、所定の手続きを行うことにより、任期が連続するかどうかを問わず、役員への再任をあらかじめ辞退することができる。」

該当の会員には、来年 2 月頃にご意向をお伺いする文書を送付します。

今回の内規によって若手会員を含むより幅広い層からの役員登用を促進すると共に、年来の懸案となっていた投票率向上の課題にも取り組んでおりますので、何卒会員各位のご協力をお願いします。

また今回の内規改訂に伴い、次回の選挙準備を早めに進めるために、第 4 回理事会において選挙管理委員会のメンバーを提案し、以下の会員が承認されましたので報告します。

芦谷耕平 上田学 奥野邦利 古賀太 佐藤博昭 志村三代子  
武田潔 仁井田千絵 西村安弘 橋本英治 渡邊大輔

以上

（おかじま ひさし／東京国立近代美術館フィルムセンター）

## 研究企画委員会報告

委員長 太田 曜

## 報告と計画について

10 月 1 日の研究企画委員会に於いて、主に二つの事が議論された。

ひとつは、映像学会のホームページを会員の意見交換の場として有効利用する事について、だった。

これは以前、機関誌編集委員会村山先生からもご提案があった事とも関係している。作家の会員の、例えば作品発表の報告のようなものは、現状ではなかなか機関誌には掲載され難い。また、エッセイやインタビューといったものも研究論文が中心の機関誌には掲載され難い。

一方で、2010 年から映像学会のサイトがリニューアルされて、情報発信がインターネットでも行なわれるようになった。ただ、研究会などの開催の告知情報や、映像学会の全体的な案内などにとどまっている。このサイトを利用して、機関誌には載らないような作品発表の報告や、エッセイ、インタビューなどといったものを発表してはどうかというのが、議論の主旨だった。

映像学会設立の趣旨には「既存の媒体を対象とする学問的研究を超え、映像という共通の問題意識を大切に、人間と社会の未来について、自由な討論と関連な研究の場をつくり出すことです。」と書かれている。サイトの有効利用はこの学会設立の趣旨にも合致するものと考えられる。

具体的にどのようなやり方で、サイトを有効利用するかは、今後研究企画委員会で話し合い、理事会に提案したい。

二つ目に、研究企画委員会に所属する研究会へ予算を配分する事についてが話し合われた。以前一度理事会で確認された事があるのだが、研究企画委員会の中の研究会への予算配分に関して再確認した。その後の理事会でも委員会内の研究会の予算（経費）については、理事会で承認するという事が再確認された。

委員会内の各研究会の活動状況に関しては、サイトに既に告知、報告が掲載されているのでここでは省略。

以上

（おた よう／映像作家、東京造形大学）

## 戦前戦中期・記録映画におけるドイツと日本の影響関係をめぐって——ドイツと日本の資料調査に関する中間報告

奥村 賢

日本の記録映画は、1930年代から40年代にかけて急速な発展を遂げ、第一次黄金期を築きあげた。そしてその背景には、ドキュメンタリーを中心とする欧米映画の影響があったことは周知の事実である。だが、この受容の実態についてはいまだ不明瞭な部分が少ない。今回の発表では、現在、早稲田大学演劇映像学連携研究拠点の公募研究においておこなっている探索作業を踏まえ、その調査項目のひとつであったドイツの記録映画との影響関係について、以下の報告をおこなった。

### (A) クルトゥーフイルム関係

#### ①日本における反響

30年代中期から東和商事が順次、公開していった短編科学映画は、日本において大きな反響を呼んだが、日本人にとって魅力的だったのはどういう点だったのか。この点をあきらかにするために、今回はドイツ側の資料から、日本公開作品に関する基本情報の確認から始めた。主要点のひとつはドイツ公開版と日本公開版との異同点に関する検証だった。なぜなら、もし両者に相違点があれば、そこに日本人の映画観や美的価値観が反映されていると考えられるからである。だが、調査の結果、ドイツにあるオリジナル・プリントと日本公開版には基本的な相違はないことが確認された。

#### ②東和商事／川喜多長政

同じ視点から、学術的内容で収益の見込めないクルトゥーフイルムがなぜ輸入業の関心をひいたのか、あるいはどのような経緯で輸入されることになったのか、また、膨大な数のクルトゥーフイルムのなかからどういう基準で輸入作品が選定されたのかについても、調査をおこなった。焦点となる中心人物は東和商事社長・川喜多長政だが、おもにドイツ側資料をとおして彼の動向や評価を追ううち、その背後に日独の急速な政治的接近と日独文化協定の締結（日独文化交流の強化）という時代の大きなうねりがあるのを無視するわけにはいかないことが判明した。発表では、この動きが川喜多の意図や価値判断に少なからず影響をおよぼしたのではないかという仮説を提示した。また同時に、通説化している東和商事や川喜多長政に対する評価も、再検証する必要があることも示唆した。

### (B) 『ドイツ週間ニュース』関係

戦時期、『日本ニュース』は『ドイツ週間ニュース』に大きな影響を受けたといわれているが、その影響関係のうち、以下の点について実地調査をおこない、確認をとった。ひとつは『日本ニュース』のタイトル画面は『ドイツ週間ニュース』のみならず、それ以前のニュース映画『ウーファ発声ニュース』とも影響関係はないこと、もうひとつは、以前、筆者は拙論で日本の落下傘部隊をはじめフィルムにおさめた『日本ニュース』第八十八号ニ「セレベス 奇襲作戦」は、『ドイツ週間ニュース』の影響を受けたと論じたことがあるが、当時、不明だった後者の号数は561号だったことである。

このほか、ヴァルター・ロットマン作品と日本の記録映画との影響関係についても暫定的報告をおこなった。

(おくむら まさる / いわき 明星大学人文学部表現文化学科)

## 編集後記

総務委員会

■新春を迎えた。と言っても、昨年の3月11日以来の、東北および関東の震災および津波そして原発事故の影響は、まだながくこの列島に影響をあたえるであろう。また日本映像学会の仕事も、数多くの長所と欠陥を含みながら強く前進して行くものと予想される。

近藤耕人会員から、新しい年の巻頭文を頂いたが、視点を変えることによって、数多くの新しい分野が開かれることを示唆しておられる。事実、演劇や美術の世界も、映像の世界を考慮に入れなければ、研究の場が展開し難くなってきている。しかし同時に、映像の世界も、この世界を成り立たせている、根源の分野に、勇敢にメスを入れる時期が迫ってきていると予感している。(山田)

## FORUM

## フォーラム

## フォーラム

### ■映像情報メディア学会映像表現 & CG 研究会 映像表現フォーラム [映像表現に関する特別講演と学生作品・研究発表会] 発表募集のお知らせ

標記研究会を開催いたしますので、下記テーマにつき講演（作品・研究発表）を募集いたします。本年度は芸術科学会・芸術科学フォーラムと同時に開催いたします。これを機会に、「映像表現」をキーワードとした技術と芸術との交流が、今まで以上に深まるものと期待しております。奮ってご応募ください。

#### 【テーマ】

映像表現に関する作品制作や技術的研究などについての発表会

#### 【スコープ】

映画・ビデオ・CG（静止画を含む）・ホログラム・その他映像全般について、表現に関する技術的研究から映像作品まで、主に学生を対象に若い方々の斬新な研究や作品制作の講演・ポスター・展示を募集致します。チャレンジ精神あふれるユニークな研究や作品を期待します。

作品発表は1件あたり原則として10分以内にてください。作品発表にはビデオプロジェクタを使用します。パソコン使用の場合は、原則として、発表者に準備して頂きます。また、ビデオプロジェクタ以外の映像機器を使用する場合も発表者に準備していただきます。困難な場合は事前にご相談下さい。

#### 【日時】

2012年3月16日（金） 9時～18時（予定）

（発表時間等はプログラムの関係で調整することがあります。）

#### 【場所】東京工芸大学 中野キャンパス 芸術情報館

（地下鉄／東京メトロ丸ノ内線・都営地下鉄大江戸線—中野坂上駅下車1番出口より徒歩約7分）<http://www.t-kougei.ac.jp/guide/campus/access/#nakano>

#### 【申込締切】

2012年1月16日（月）

#### 【申込先】

○映像情報メディア学会ホームページ（研究会発表申し込みシステム）

<http://www.ite.or.jp/> → 「研究会」 → 「研究会発表申し込み」

映像作品発表およびポスター発表、デモ展示をご希望の場合は、発表申込ページの「備考」欄にその旨ご記入ください。

#### 【問合せ先】

○東邦大学理学部情報科学科 新谷幹夫 宛

TEL 047-472-1277 FAX 047-472-1277

E-mail: shinya@is.sci.toho-u.ac.jp

#### 【共催】

画像電子学会、芸術科学会

#### 【協賛】

情報処理学会、電子情報通信学会、日本映像学会、日本写真学会、日本映画テレビ技術協会（予定含む）

#### 【注】

登壇者あるいは共同研究者の中に当学会員（共催・協賛含む）がいることが原則ですが、それに当てはまらない方は事前にご相談下さい。

以上